

父の誤算

丸 房代

近年、林立する工場の夜景クルーズが注目されている。夜の工場は無機質な金属色を廃し、赤や橙、白色と幻想的な光のジャングルに姿を変え人々を魅了する。昭和の前半まで千葉県の東京湾側の海岸では、遠浅の景勝地として海鳥が遊び、海水浴や潮干狩りを楽しむことができた。一九五〇年代から千葉県の産業は工業化が進む。それ以前は農業や漁業従事者が大半であり、県を大きく発展させるための事業が必要とされた。千葉市の湾岸から埋立工事は始まり、川崎製鉄や東京電力千葉火力発電所の完成により、千葉県は工業生産都市へと大きく舵を切ることになる。この埋立工事は市原へ延び袖ヶ浦町まで続く。

県はこの開発に千葉方式を採用し、進出企業の子納金を漁業補償と土地造成費などに充てた。造成された埋立地一帯は、化学・鉄鋼・石油など日本最大級のエネルギー供給地となり、京葉工業地帯が形成されていった。

市原市では、明治三十三年初めて海苔^の養殖が始まり、主に五井地区で盛んに行なわれた。昭和三十年半ば、コンビナート建設が開始され、四十年には漁業権を譲渡し海苔養殖は幕を閉じる。これに追従するように、大きなうねりは袖ヶ浦市に波及し変化の時
は否応無しに迫って来た。この頃、父は四十を過ぎていたが、働

き次第で儲けも大きくなる海苔養殖の仕事にやりがいを感じていた。しかし、開発は始まる。

袖ヶ浦の「奈良輪漁業協同組合」での会合は繰り返され、賛成、反対、両者の対立は熱を帯びる。補償金と引換えに、天職であったはずの海苔養殖の漁場放棄、組合解体の決定は迫られた。父は代表となり当時の県知事、千葉中興の祖と呼ばれた友納^{とものおたけ}武人知事と、膝を突合せる交渉を幾度も重ねた。反対の声は徐々に薄れ、巨大な力に立ち向うことはできなくなった。それならば組合員のその後を守るための補償金の確保が重要と、毎晩遅くまで一軒一軒に納得のいく説明をする、父の姿が思い出される。海の男たちには、身体の半分を失うような決断だったろう。父の村に海は失くなった。

昭和五年、当時は檣葉^{ならわ}村と呼ばれ、昔からの小さな漁村で父は生まれた。父親と母親、姉がひとりいた。小学校へ入学してまもなく、父は父親を亡くした。その日、従兄は学校まで父を迎えに走ったが、信じられないことを口にした。それ以来、卒業の日まで父の眼に映る小学校生活は灰色に変わり、楽しい思い出はひとつもなくなった。

成績の悪くなかった父は、中学卒業後高校への進学を考えていたが、母親のたつての頼みで普通科の高校をあきらめ、農業高校へ入学した。どうせ、家を継ぐのだから役に立つ高校へと、母親は父を説得した。学校を出るとすぐ家業の海苔養殖の仕事をした。姉が嫁ぐまでは母親と三人、力を合わせたが、働き者の姉が結婚してからは、力仕事のできない母親と苦労を重ねた。海苔の

仕事は家内作業だから、家族が少なく働き手がいらないのは、どうしようもなく菌痒い。このことは父の骨身に沁みて生涯消えなかった。

嫁して七年目で姉は亡くなった。結核を病み離れの小屋で寝かされ、面倒をみる人もないと聞き、父は姉を背負って連れて帰り、母親と看病した。

父が二十三才の時、嫁をとる話が起こり、母との縁を得た。働き手のない父は、少しでも早く嫁して仕事を覚えて欲しかった。仮祝言という形で母は父に嫁いだ。昭和二十八年二月三日雪の散らつく節分の日。母親と二人暮らしのはずが、その母親もこの時、胃癌治療のため千葉大学附属病院に入院中。冬の終りの婚礼の日、たった独りで準備から当日の主役まで、料理や酒の手配から支払いまでする、花婿を気の毒に思つたと、母は思い出を語つた。家を守るため、村の寄合いに出て後ろ立てのない下っ端の父は、雑用係として走り回るばかりだったと回顧する。

昭和二十九年に生まれた私は、歩き出すとすぐ父の後ろを舟溜りまでついて行った。そこで出漁を待つ男たちに混じり、海苔の成育や冬の季節風の話を耳学問した。冬の北西風は、「なれっ風」と呼ばれ乾いて冷たい。この風が海苔を育てる。舟溜りの男たちが待っているのは漁業組合からの放送だ。三波春夫の「船方さんよ」が流れ出し、組合のお姉さんのアナウンスが始まる。

「本日は北西の風○メートル、強風のため、出漁は中止致します。」あるいは、

「本日の出漁を許可致します。」など。

この放送を受けて、三三五五家に帰る日も、また海へ出るための準備に勇み立つ。この日常、村人が守った海の暮らしが終わる。冬の海は木造船の底板、たった一枚下は地獄と覚悟しての海苔獲りだったが助け合つて来た。救命具も付けぬまま男たちは海へ出た。しかし、海を失くした村は人気もなく人声も失せた。

袖ヶ浦市に上陸した工場群は、巨大なコンビナートに成長していった。ひと度、動き出した工場は休むことのないモンスターとなり、昼夜眠らず息を吐く。コンビナートの企業は廃業した地元の人々を入社させた。奈良輪地区でも、日本を代表する大企業からの誘いが続き、父は出光石油化学千葉工場で働くことを決めた。出光は、市原市姉崎地区千種海岸に操業を開始しており、家からは車で十分足らずだ。父の仕事は、東京湾に入港し工場そばに着岸した巨大石油タンカーから、パイプラインを通じ工場内タンクへと原油を移動させることだ。モニターチェックなど計器の確認をする。父の真面目な勤務態度は、更に必要な従業員の勧誘を任された。真面目な人の紹介ならば安心と会社からの信頼を深めた。知つての通り、出光興産は出光佐三氏により創業された会社である。父が社員であった頃、社員とその家族を慰労する催しがあった。社員の父が、拝顔の榮に浴するはずのない社長、出光佐三氏を遠くから眼にするチャンスとなった。父はよく言っていた。平社員でいつも上司に頭を下げ、言われたままの仕事をする情けなさ、何ひとつ自分で考え行動できないもどかしさ、己の責任は伴うものの、自らの意志が形になる手応えのある仕事がないと。

サラリーマンは向かない。しかし、父も母も定年の五十五才まで働いてくれた。父が定年になって母に言ったのは、

「社長になりたい」

母は面喰った。今までペコペコした分、今度は頭を下げられる側になってみたい。母は押し切られた。父の人生でひとつくらい、希望を叶えてやりたい。それから二人は、多くの知人の助けを借りて小さな会社を作った。

父は社長になった。

袖ヶ浦市公共施設の入札に参加するまでになったが、社員は家族、他にはパートのおばさんばかり。父自ら営業に、そして卒先して仕事をする。知人を頼り営業し、父はまたペコペコしていた。父の考えていた社長ではない。出光佐三氏を夢みていたのに全く違った。それでも、妹夫婦に会社を譲るまで、貧乏社長として頭を下げ続けた。

私や妹にとって、父は得体の知れない人間だった。家の中では寡黙でよく怒っていた。家族に縁の薄い結婚前の父は、心に不安の闇を飼っていて、その不安は少年の癪癪なしかとなり、大人になって母を困らせた。父親の愛を知らぬ父が、自分の子の育て方に迷い、話もできず悶々としていたのだから、妻や子に怒鳴ることも今なら理解できる。

私が父と話せるようになったのは大学受験の時。私の進学を周囲の者は反対したが、父は自分の進学の悔しさを忘れておらず、私に同じ思いはさせないと決めていた。私は大学生になった。

黙ったままの父が変わったのは、私が子を産み、父に初孫がで

きてからだ。息子の誕生を素直に喜んでくれ、おおい紐が肩に食い込む程、背負いあやしてくれた。公園ではぶらんこの息子の背をいつまでも押し続けた。私の夫や義父、義母ともよく話しをした。

思い通りの人生を生き抜くことは難しいが、父の人生において、考え通りにいかなかったことを「誤算」と呼ぶならば、どこに誤りはあつたろう。

守ってくれるはずの父親を失った小学一年。

希望通りの進学ができなかった春。

漁業権を奪った巨大企業でのサラリーマン時代。

起業し社長と呼ばれても苦笑いした日々。

数々の誤算はあつたものの、晩年は好々爺として、働くばかりの来し方に帳尻を合わせるように平穩を手に入れた。

それなのに、父の最期の誤算はやって来た。年に一度の健診で、レントゲン写真にみつけた肺癌の影。ステージ4で余命半年を宣告される。酒も煙草も止めなかったし、いつかはこんな日が来ると覚悟していた。入院も治療も望まぬ父は、自宅での緩和ケアを選択し、母と今まで通りの生活を続け、本当に六ヶ月後に逝った。誕生日のお祝いビールを一口飲んで、翌日から一週間ベッドに寝た切り。父は荒い呼吸をしながら家族のおしゃべりを聞いていた。時々呼吸が止まり、それがだんだん長くなり、終いに戻って来なかった。父は長くて暗いトンネルを抜け、父親や母親、姉の待っている天国に到着したのだろう。人生を肯定して逝けたのか。自分の名前に「ひとりぼっち」の代名詞を付けて、殻

に籠もった日のことを忘れられたのだろうか。

「人貧乏」といわれ、あれほど欲しかった家族を手に入れて、父の心は温暖化のせいではなく、家族の笑顔で溶けてそのまま安心して逝った。生まれた家で、家族の中で逝けたことは最期の「誤算」とはいえないかもしれない。

今の気がかりは遺した母のことだろう。母の思いとはうらはらに、なかなか父のそばへ逝けないでいる。母の安らかな旅立ちを手助けしてやって欲しい。

父の生きた村は目まぐるしく変わり、知人もいなくなり、母はひとりの暮らしを続けている。益々の埋立は進み、池のようになった東京湾に橋が架かり、工場群だけでなく、東京のビル群の夜景までも、手に取るように輝いてみえるこの町で、母は父の招待を心待ちにしている。